

聖書：ルカの福音書 14 章 25～35 節

説教：主の弟子となる

1 すべてを捨てなければ主の弟子になれないのか？

1) なんと厳しい条件

イエスは、しばしば常識と正反対のことを語ります。26 節。「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分の命までも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。それだけではない。33 節。「あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」

クリスチャンは肉親も財産を全部捨てなければならぬ。それではどこかの新興宗教と同じです。もし私がみなさんに家族を捨てなさいとか、財産を全部教会に寄付しなさいとか言い始めたら、頭がおかしくなった証拠ですから、従ってはいけません。すぐに辞めさせるべきです。それはそうとして、家族や財産を捨てることではないとしたら、ではいったい何を言おうとしているのでしょうか。

2) 建築と戦いのたとえ

もう一つわからないのは、28 節から 31 節にかけてのたとえ話です。塔を築くために十分な計画と費用の計算が必要であること。国と国とが戦争を始めるとき、あらゆることを事前に考える必要があること。いずれもまったくそのとおりです。でも、それが主の弟子となることとどんな関係があるのか、そのつながりが全然見ません。そのことも疑問です。

2 憎み、失う者

1) 見方を変えれば

まず最初の疑問から見ていきましょう。主の弟子となるために家族も財産も捨てなければならないのか。聖書のことばを疑うのは不信仰だと思ふ方もいるようです。でも、これを読んだらだれだって変だと感じます。それはきわめて正常な反応です。というのは、これは引っかけ問題だからです。真理に気がつくように、イエスはわざと変だと思われるような言い方をしている。そう思って結構です。

では、どう読めばよいのか。26 節を真正面から読んでしまうからとまどいます。こんなときは、少しわきにずらして見方を変えてみるとよい。

最初から親を憎もうとする人はいません。妻や夫も、この人なら一緒にやっていけると確信したから結婚したはずですが。でもいまはどうですか。親と仲良くしてきたでしょうか。妻や夫、子ども、兄弟、姉妹とはどうでしょう。家族親戚、みんなとうまくやっています。そういう方も中にはおられるでしょう。しかし多くの方はそうではないはずです。親とは口もきかない。実の子どもなのに、何年も会えない。兄弟とは親の介護のこととか、遺産相続のことでさんざんもめている。そんな話が世間には一杯あります。私も同じです。皆さんもそうでしょう。

自分から望んで親兄弟、配偶者を憎む人はいません。なんとか修復したいと願います。

自分なりの努力はしました。がんばってみました。けれどもどうにも我慢がならない。ついつい厳しいことばを相手に投げつけ、けんかしてしまふ。そんなことの繰り返し。繰り返せば繰り返すほど自分が悲しくなります。なぜもっと愛することができないのか。なぜもっとやさしく接して上げられないのか。自分を責めます。そんな経験を皆さんもしてきたのではないですか。いままさに、その真っ最中ですよという方もおられるでしょう。それが私たちの誤魔化すことのできない現実です。親を愛せない自分であることにショックを受ける方もいます。そんな自分を責めていきます。

## 2) 資格は十分にある

そうするとどうなりますか。26 節をもう一度見てください。これは、努力して自分から進んでやることではない。もうすでに家族を憎んでいます。そうしたくないのに、そうなってしまう。それで苦しんでいます。ということはどうなるか。あなたは、もうすでに主の弟子となる資格が十分にあることになる。あなたがもし家族を愛せないということ自分で自分を責めて、苦しんでいるのなら、あなたはもうすでに、わたし、主イエス・キリストの仲間だ。そんな内容のことばになります。自ら進んで親兄弟を憎めということではありません。すでに親兄弟を憎んでしまっている。そんな現実の中に放り込まれている私たちのことを、主はすでに知ってくださっている。そんなことばです。

## 3 塩のたとえ

### 1) 聖書を読むときの二つの原則

続く 28 節以降にあるたとえ話のことは、

後で触れることにします。先に塩のたとえのことは見ます。ここは、塩けをなくしたら使い物にならないので外に捨てられる。だから気をつけなさい。なんとなく、そんなことかと考えます。でも、なぜここに塩のたとえ話が出て来るのでしょうか。ここになくてもよいような話に聞こえます。

こんなとき、聖書を読むときに大切な原則を二つ覚えておくとよいと思います。一つ目。聖書はでたために書かれているのではなく、すべてがきちんと理由があつて順序立てて書かれています。前後につながりが必ずある。そのような原則です。それが一つ目。

二つ目の原則。イエスが私たちに、こうしなさいとか、こうしてはいけないと語るとき、イエスは安全地帯にいるのではないということです。語ったことを自分から率先してなさる方である。それが二つ目の原則です。

### 2) 憎まれ、奪われ、外に捨てられるイエス

実際に、この二つの原則を応用して読んでみましょう。イエスは家族や仲間を憎みなさいと言われました。でも、この方はだれをも憎むことはありませんでした。その代わりに人々から憎まれました。この方は、自分の十字架を負う必要のない神のひとり子でした。その代わりに、自ら十字架を背負い、ゴルゴダの丘の上で十字架につるされました。この方は、地上でたくさんの財産を持つことはありませんでした。その代わりに、唯一の財産とも言える服や下着をはぎ取られました。

十字架の周りで人々は叫びました。「おまえは、自分たちを救ってくれる役に立つ男だとすっかり信用していたのに、なんだこのごまは。役立たず。」とののしられ、エルサレムの外で殺されました。まさに、この塩のた

とえ話のように、外に投げ捨てられました。塩のたとえ話。実は、イエスご自身のことを指しています。

### 3) 十分に計画されたイエスの歩み

では、塔を築くたとえ話と、戦いに備える王の話はどんな関係があるのでしょうか。何か事を起こす前に、きちんと計画しなさい。そんなことを言われなくても常識として知っていることです。わざわざ強調するということは、イエスもきちんと計画して行動している。それを言いたいのだということになります。

でもどうでしょうか。イエスはすべてを失い捨てられていきました。世の人々の目から見ると、立派な建物を建てようとして土台を据えたところまではよかった。けれども、そこで資金が尽きてしまって、計画が台無しになってしまった。そんなふうには見えません。物笑いの種です。

少し昔のことですが、日本でバブルがはじけた頃、立派なマンションが建ったのに会社が倒産してしまい、しばらく玄関が封鎖されていたのを見たことがあります。まことにみじめな風景でした。

イエスは人々を救おうとがんばったけれど、先を見誤って、殺されて、挫折した。イエスは無謀な計画をたてた愚かな男だった。そういう結論になります。

でもイエスは言いました。きちんと先を見通して計画をたてなさい。言った以上、主もそのように行動されます。この方は、お生まれになった最初のときから十字架に向かう計画をたてられ、十字架にだけ目標を絞って行動されました。私たちに捨てられるために、私たちの所に来られと言っていいでしょう。

私たちからすべてのものを奪われ、いのちさえ奪われる。そのために来られました。失敗したのではなく、最初から計画された通りでした。

### 4) 捨てられた者とともにおられる主

いったい何のためにそんな愚かに見えることをするのでしょうか。神は私たちを救おうとしています。ここに救いがあるから、がんばってこちらまで来なさい。そんな救いではありません。神のほうから私たちの所へ救いを携えて来てくださいます。どんな姿をしましょう。捨てられた姿をとってです。人々から憎まれ、なにかも奪われ、みじめな姿をとられ、私たちの所へ来られます。

いっぽう、私たちはどんな姿をしていますか。よい人間でしたか。とんでもない。親を憎んでいます。兄弟姉妹を憎んでいます。親しい友人に対してでさえ、自分よりもよいものを持っているか、それを見ただけでねたんでしまいます。そんな自分に愛想が尽き、自分を憎みます。若くて健康なときは、多くのものを持っていると思っていました。けれどもあるとき、財産を失います。病気によって健康を奪われていきます。死ぬときは、すべてのものを奪われます。どこにも望みがありません。どこにも光がありません。だれにでもそういうときがやってきます。

そんなあなたのそばにだれがおられるのでしょうか。すべての人はイエスを見捨てました。でも、イエスは私たちを見捨てようとはしません。私たちと同じ姿になられて、あなたのすぐそばに寄り添おうとされます。

あなたを救うために主は小さくなられます。神であられる方なのに、小さくなられることがこの方の最初からのご計画でした。弱

くなられた主の向こう側に、確かな救いの光が輝いています。この方とともに歩むなら、もう捨てられることはありません。この救いを奪う者はだれもいません。

主の弟子となる。努力してなることではありません。反対です。自分は弱い者である。そう気がついたとき、私たちは主の弟子として迎えられていきます。